

助成年度：平成 10 年度

[所属] 京都大学大学院 農学研究科
[役職] 教授
[氏名] 田中 克 (他計 6 名)

[課題]

有明海筑後川河口域に生息する絶滅が危惧される魚類の 近年における出現動向

[内容]

有明海は中国大陸沿岸の河口域に類似した環境を有し、多くの大陸遺存の特産種や準特産種の生存を可能にしている。近年における有明海を取り巻く環境の変化は大きく、これらの希少種の絶滅が危惧されている。本研究は筑後川河口域において、これらの魚類仔稚魚の季節的出現動態を周年採集により調べるとともに、1980 年以来毎年春季に実施してきた稚魚網調査試料をもとに経年変化に検討を加えた。

- 1) 1998 年 3 月中旬より 1999 年 8 月まで毎月有明海筑後川河口域において稚魚網採集を行い、ヤマノカミ・アリアケヒメシラウオ・エツ・ムツゴロウなどの有明海特産種や準特産種の仔稚魚が季節を変えて出現し、それらはいずれも低塩分汽水域を主要な成育場とすることを明らかにした。
- 2) スズキ属仔魚は有明海やその周辺海域の沿岸浅所に広く分布するが、湾口部や湾外では大部分がヒラスズキであった。湾内では奥部ほどスズキ稚魚の密度は高かったが、筑後川に溯上した個体群と湾奥部碎波帯に出現した個体群の遺伝的差異は今後の課題として残された。
- 3) 大陸遺存種のかいあし類 *Sinocalanus sinensis* は塩分 0.1~10 程度の低塩分汽水域を主分布域とし、春季と秋季に現存量は著しく増加した。筑後川河口域を成育場とする特産種や準特産種の仔稚魚にとってとりわけ重要な餌資源と考えられた。
- 4) 筑後川に溯上したスズキ稚魚の hybrid index は中国産スズキ寄りであり、スズキ寄りの hybrid index を示した非溯上群との間に差異が認められた。筑後川に幼期に溯上する個体群は中国産スズキの遺伝的影響をより強く受けている可能性が推定された。
- 5) 1980 年以降毎年 3 月に実施してきた筑後川河口域における稚魚網採集結果より、有明海特産種の出現は年によって著しく変動するが、アリアケヒメシラウオやスズキは近年比較的高い水準を保っているのに対し、ヤマノカミ・エツ・アリアケシラウオなどでは減少傾向が危惧された。